



丹波市における郷土史研究の潮流 : 近代～現代 (<小特集>地域史研究団体の潮流)

足立, 義昭

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 14:101-117

(Issue Date)

2022-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481732>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481732>



丹波市における郷土史研究の潮流——近代～現代——

足立 義昭

はじめに

郷土丹波市に生まれ育ち大正・昭和から平成にいたるまで、地域に根ざした歴史研究を続けて来られ、私たちに今もつてご教示頂いている郷土史研究家の先生方は、どのような思いを以て郷土史の研究やその執筆に至ったのだろうか。

今は既に鬼籍に入られた七名の方々の、その思いや事績を紹介したい。

また丹波市内には昭和・平成・令和にかけて数多の地域誌が発刊されている。これらは静かに、しかし確かな流れとなつて地区・地域の歴史を伝承している。今回はその内五誌のみを揚げてみたい。

一 郷土史研究の奔流となつた研究者たち

(敬称略・アイウエオ順)

(一) 蘆田輝夫

あしだてるお

1 主な著作・著述

「佐治川井堰の成立」、「秋葉講縁起」、「丹波倉町野」(共著、丹波市、一九九六年) 他

2 経歴・事績等

大正一〇年(一九二一) 氷上郡芦田村(現在の丹波市青垣町)に生まれる。没年は令和三年(二〇二一)。

昭和二二年(一九四七) から同三四年(一九五九) までの芦田村立芦田小学校(現青垣町)を振り出しに、長く教員生活を送る。元丹波史懇話会¹⁾副会長。

地元の古文書同好会等での近世の古文書の解説・解説指導や講演活動のほか、「丹波史」(定期的に発行される丹波史懇話会



写真1 蘆田輝夫

の論考集）等での論考、著述等多数を発表している。確かな資料調査に基づいた研究からなる、解りやすい指導、講演、著述には定評があった。

その一例を挙げてみる。

(1) 「丹波学」（兵庫県丹波の森公苑開催の市民向け歴史講座）の平成一六年度講座に於いての講演「奥丹波の方言」では「丹波弁」の特徴を解説している。

① 「丹波弁」には京都の古語が多い

これは丹波が京都から但馬への交通が頻繁な位置にあったことによるとしている。

② 抑揚が日本海沿岸型である

「ねーえ」（筆者註——問いかけたり同意を求める時に使う。語尾が上がる）ほか。

③ 日常用語に「さ」ぬき言葉が用いられる

「起きなさい」↓「おきない」、「食べなさい」↓「たべない」等々。

(2) 共著『丹波倉町野』⁽²⁾では、一帯に住んだ木地師の史蹟や伝承を紹介、山を越えた北側の佐治の地名「小倉」⁽³⁾は木地

師ゆかりの「小椋」⁽³⁾から、また南に越えた水上町清住の達身寺の仏師もこの木地師につながるとの解説を加えている（筆者註——達身寺の奥山には、慶弔時の膳の必要な時、黙つてその数を叩けばその食器が貸し出されたという伝説の岩がある）。

(3) 『丹波史』第一四号（丹波史懇話会、一九九四年）の古文書解説による論考、「安政の無法者、栄吉の生涯」では、村役たちが安政二年（一八五五）卯正月九日付で「御奉行様」宛に差出し、顛末を詳細に述べた「申し候」、「乍恐御届ヶ奉申上候口上書」他御赦免の願い状五通の書状をもとに、下記の事件について紹介、解説を加えている。

現在の丹波市内のとある集落で、安政二年に起きた事件である。「村役二人が悪党一人の探索をしているところに、通りあわせた村人の栄吉が加わる。栄吉は多少気の荒い性格ではあったが、両親・兄と四人で穏やかに暮らしていた。しかし村役二人と目星をつけた小屋に踏み込むと、潜んでいた悪党が村役二人に襲い掛かってきたため、栄吉が木切れで応戦。さらに聞きつけた村民たちも加わり、一緒にこの悪党を打ち据えたところ悪党は死亡してしまう。

連座した村役たちと栄吉は共に京都東奉行所に出頭するが、過料金五百貫文で赦免される。最初に打撃した栄吉の吟味は特に厳しかったのだろうか、これを機に栄吉の生活

は荒れ、せつかく娶った妻もともに生涯を狂わせてしまう」という内容で、当時の風習・風俗も含めて興味深い。

芦田輝夫氏は「栄吉の一生はちよつとした間違いが元で人生の進路を狂わせてしまったもので、封建時代の厳しい制度のもとに虐げられた一市井人であると言える」と結んでいる。

主に青垣町・氷上町の講座を中心に「輝夫先生」に古文書の解説を学んだ人は多い。

3 受賞歴

兵庫県ともしびの賞（平成一七年）他

4 引用文献

『丹波倉町野』（前記）、『丹波史』第一四号（前記）他

（二）白井芳郎

1 主な著作・著述

『幸世村誌』（編集主任・共同執筆、幸世村誌編集委員会、一九七三年）、「丹波の農業史」（丹波新聞にコラム連載）、「俳句と仏教」（自費出版）他、氷上郷土史研究会等での著述、講演多数。

2 経歴・事蹟等

明治三九年（一九〇六）、現在の養父市関宮町に生まれる。実兄に但馬俳壇を牽引した俳人北村南朝がある。



写真2 白井芳郎

その後氷上郡幸世村（現丹波市氷上町）の白井家に迎えられる。

長い教育者生活の後、昭和二年（一九四七）より幸世小・中学校校友会々長を四期務める。

昭和二九年（一九五四）、柳宗悦、上村六郎、足立康子、八木甫瑳子氏（白井芳郎氏息女）と共に復興の端緒を切った国指定選択無形文化財「丹波布」の顕彰や振興に貢献した。

昭和四八年（一九七三）に刊行された『幸世村誌』では、編集主任として上代・古代からの地域の歴史を説き起こし、中でも「賀茂伊可古夜比売」についての記述は詳細で面白い。また同誌には幸世村内各集落の歴史伝承が現地踏査のもとに実に詳しく述べられている。

しかし編集後記には、「重要書類が進駐軍の指示で県庁に提出され、また焼却したり必要以上に処分されたものが多く、有るはずの村役場倉庫にはほとんどなかった。また一般に散在するはずの古文書類も和紙が珍重され、紙類の不足と共に古紙がどんどん消費されたので資料の収集には大変な苦労があった」と記されている。

一方、編集方針としては「幸世村を単なる一村と考えず、日

本の中の幸世として絶えず全国的見地から日本国との関連から眺めた。さらに村内の各集落の歴史を詳説した。幸世村はわずか八十年（幸世村誌発行当時―筆写註）であるが、各村落には何千年の歴史があるからである。」と述べている。

著書『氷上の地名を尋ねて』（丹波新聞社、一九五五年）には、細やかな資料調査に基づく氏の研究成果が述べられている。例えば山西（古来からの表現で、氷上郡を通過する瀬戸内海側と若狭湾側の分水嶺から西側の現氷上町・青垣町等）の「迫」に対する山東（分水嶺の東側の春日町・市島町）の「貝」についてなどである。

筆者は市島町の「市ノ貝」、「新道貝」の貝は、「山垣」、「上垣」の垣と同義で類語の「牧」と同様、同族の小集落の呼称であろうと考えてきたが、白井氏は「貝」は「峽」であり、「迫」は「狭」と「処」であり、つまり山と山が寄り合った狭い地域で人が住いを構えるのに適した場所を言うのである」と述べている。

筆者はまた嘗て氏が書庫とされた白井邸の別棟に、御息女八木甫瑳子氏のご案内を頂いたことがあるが室内いっばいに並ぶ書架の列には目を瞠った。

さらに手に取らせて頂いた蔵書数冊の全てに手書きの注釈や添え書きがあり、膨大な読書量と共に研究の緻密さに感嘆したものであった。

白井氏は俳人（俳号…白井方浪）としても多くの作品を発表、不動山岩瀧寺にも句碑を遺している。さらには氷上寿学級に今も続く「くるみ句会」を立ち上げ、講師としても地域の俳句の普及・振興に尽力した。

また勤務した現在の丹波市立北小学校、同西小学校には白井芳郎氏作詞の校歌が今も生徒によって歌い継がれている。

3 受賞歴等

「兵庫県ともしびの賞」他。同賞は令兄北村南朝氏と兄弟受賞、令嬢八木甫瑳子氏とは親子での受賞となっている。

4 引用文献

『幸世村誌』（前記）、『氷上の地名を尋ねて』（前記）他

（三）奥谷高史

1 主な著作・著述

『丹波古銘誌』（綜芸社、一九七五年）、『丹波の古道』（綜芸社、一九八〇年）、「むかしの旅と街道」（丹波新聞社）他

『丹波古銘誌』は京都府内も含めた丹波全域の神仏像、鐘、鰐口、石塔、灯籠、町石、その他について一〇〇件余を踏査・解説している。

鰐口に山南町石龜寺の建武四年（本文では南朝暦の延元二年・一三三七）がある。これは南北朝初期のもので、ゆかりの深かった足利尊氏の寄進に関わるものとされている。

著者はあとがきの中で「我々はこの貴重な文化財を損なうことなく次の世代へ伝えなければならない。また一般の人々もこれらの文化財をよく理解し、深い愛情を以て郷土文化財の保護に協力しなければならないと思う。」と本書の刊行に当たつての思いを述べている。

次に『丹波の古道』では、まず古代丹波の駅と駅路について、丹波に始まる山陰道の駅路は、三七の駅（駅家に其々定められた頭数の馬を置く）があり、丹波には八駅、つまり大枝・野口・小野・長柄・星角・佐治の六駅と丹後支路の日出・前浪があることを確認した上で、そのうち当時の氷上郡にあつたとされる「星角」と「佐治」については以下の様に述べている。

まず「佐治」は現在の青垣町中佐治付近がほぼ定説とされているが、「丹波志」の記述や藤岡博士説を引用してさらに補足している。

一方の「星角」については昨今、氷上町石生説が有力であるが、奥谷氏は本誌で長柄駅が現在の篠山城の裏側に当たる丹波篠山市野中が旧址であるとしつつ、次の星角は味間（丹波篠山市味間地区）であるとする『日本地理資料』、「丹波志」説を紹介、しかし味間説では長柄駅から味間まで僅か一里足らずとなり、さらに次の佐治まで十里もあるとして石生説を採用している。また星角は氷上町横田と同稲継の中間にあつたという「丹生津野」で、丹生が書き写しの際に星の字に変わり津野が角

であると説明する『佐治川治水略史』（佐治川水害予防組合、一九五三年）にも触れ、これは『日本歴史地図』（西岡虎之助・服部之総監修、全国教育図書、一九五六年）でも図示されているが、古来からの低湿地であるこの地は水害を被り、駅の所在地としては不適當であると論じている。

また「太平記の丹波路」では、南北朝動乱期の丹波に於ける両軍攻防の要路について、先ず足利尊氏親子が京都で敗れて丹波に落ちてきた時の経路は「山陰道を西に向かい、長沢（中



写真3 石籠寺山門

沢）氏が地頭を勤める大山荘（丹南町大山）から篠山川の久下谷に下り、岩屋の石籠寺にたどり着いた」としている。

続いて太平記の記述（三百二十）を「御子息宰相中条殿に、仁木左京大夫頼章・舍弟右京太夫義長を相副えて二千四騎、丹波の井原の石籠に止めらる。此等の衆徒無二の志を存せしかば、軍勢の兵糧、馬の糟糞に至るまで、山の如く積み

上げたり。此所は岸高く峰聳えて、四方皆險阻なれば、城郭の便りも心安く覺えたる上、荻野・波々伯部・久下・長沢、一人も残らず馳せ参つて……と足利一行に対する地元や丹波武士たちの協力と忠節を称えた一文を紹介しながら、「井原の地は篠山川に沿って上れば前記の如く京都に達し、加古川に沿って下れば播州平野に至り、佐治川に沿って上れば山陰道によって但馬・丹後方面に通ずることが出来る交通の要衝であつた」としている。

さらに、近世丹波の山陰街道、丹波の西国巡礼道、丹波西国三十七所道中記⁹⁾、伊能忠敬の丹波地方測量について等々や、ふる里の峠について述べた後、近世丹波の俳人たちについても詳述している。読み応えのある一冊である。

2 経歴・事蹟等

本名は奥谷留吉。明治三八年（一九〇五）、水上郡鴨庄村（現丹波市市島町）に生まれ、没年は平成二年（一九九〇）。通信省出身、市島町文化財審議委員を務める。

3 受賞等

兵庫県ともしびの賞（平成二年）他

4 引用文献

『丹波古銘誌』（前記）、『丹波の古道』（前記）他

（四）小森貢

1 主な著作・著述

『水上町金石文』（私家版、一九九六年）の中では、同町円通寺の『躍然遠拳碑』（同寺四〇世で明治初期に円通寺を再興し曹洞宗管長となった日置黙仙禅師の頌徳碑で、臨済宗円覚寺派管長の今北洪全撰文・明治の三舟の一人山岡鉄太郎揮毫・関白近衛忠熙篆刻）の長文を全文翻刻、読下し文を完成している。そのほか『旧暦の妙味』（私家版、二〇〇三年）等の刊行ほか数々の著述がある。

2 経歴・事蹟等

大正五年（一九一六）水上郡生郷村（現丹波市水上町）に生まれる。没年は平成二四年（二〇一二）。元小学校校長。

丹波史懇話会、水上郷土史研究会等で地域史研究の指導者としても活躍の傍ら、丹波自然友の会代表を務め、「水上町天然



写真4 小森貢

記念物の岩滝寺溪谷の植生」では、シダ類等多様な陰地植物についての調査報告等の功績が残る。

しかし、中でも特筆すべきは、江戸初期の丹波国由良城主「別所吉治（従

五位下豊後守)についての調査研究である。別所吉治は最後の三木城主(播磨国三木)別所長治の従弟(実子説あり)といわれ、中世から近世へ移行する波乱の中、豊臣方として勲功を挙げ、細川幽斎の守る丹後田辺城を攻めたため、徳川家康により父重宗から受け継いだ但馬八木城を召し上げられ追放される。そして徳川秀忠の乳母であつたとされる伯母の別所刀藏の計いで丹波由良城主(二万石・現丹波市北油良)として復活するが、仔細あつて二〇余年の後、再び改易となり丹波を離れる。小森氏は、後述する切欠から「別所吉治」の名前を知り、この人物の特定と丹波以後の行先の探求を続け、遂に但馬香住町(現兵庫県美方郡香美町香住区)の青山幸男氏(香住町議会議長・香住町長を勤めた)に巡り合う。

当時、青山氏も先祖から伝わるもう一つの「別所」姓との関連をつかもうとそのルーツである三木市観光課等とも連絡を取っていた。小森貢氏との出会いについて青山氏は、後年、丹波市での講演でこう述べている(「青山家先祖の由来と謎の解明」)。

平成一〇年一二月、氷上町市辺で小森先生に面会した。会つてみると昭和五六年に香住町に来訪された二人の内の一人であつた。さて小森先生の実家のある氷上町市辺の二宮神社には大きな経塚があつて近くに散在していた地蔵

や無縁仏の中に、石龜などの壊れたものがあつた。先生が復元してみると石龜の破片の後ろに刻まれた文字から、僧の意春坊¹⁰⁾の願いにより別所吉治が建立したものであることが判つた。先生はこの別所吉治とは何者かを知りたくて調査に着手したのだという。(中略)

そして先生は各所に足を運び、歴史書を読み漁り、社寺を訪ねて説明を進めたのである。もし破損した石片がそのまま放置されていたなら、青山家のルーツも霧に包まれたまま、時代と共に忘れ去られて行つたことであろう。

両者の出会いによつて別所吉治が丹波を出て落ち着いた先(香住奥安木関新兵衛宅)が判明、双方の研究は遂に実を結んだのであつた。

3 受賞歴

兵庫県ともしびの賞他

4 引用文献

『氷上町金石文』(前記)、「青山家先祖の由来と謎の解明」(青山幸男氏講演資料)、丹波自然友の会、氷上郷土史研究会発表資料他

(五) 細見末雄 ほそみすえお

1 著作

『生郷村志』（共同執筆、生郷村志編纂会、一九七六年）、『兵庫のふるさと散歩5・丹波編』（共同執筆、神戸新聞出版センター、一九七八年）、『丹波の荘園』（名著出版、一九八〇年）、『水上郡名木・名林百選』（水上郡教育委員会、一九八四年）、『三丹植物方言集稿』（私家版、一九八六年）、『丹波史を探索』（神戸新聞出版センター、一九八八年）、『古典の植物を探索』（八坂書房、一九九二年）、『丹波草木誌』（丹波自然友の会、一九九二年）、『丹波但馬の植物民俗』（丹波新聞社、一九九九年）、『俳句の植物』（遺稿・細見園枝、丹波新聞社、二〇一〇年）

2 経歴・事蹟

明治四一年（一九〇八）水上郡生郷村（丹波市水上町）に生まれる。没年は平成一〇年（一九九八）。



写真5 細見末雄

昭和三年（一九二八）神戸市御影師範学校卒業。同年より小・中学校の教員・校長として勤務、昭和四一年（一九六六）退職。その後水上町文化財審議

委員会委員長、丹波史懇話会々長、丹波文化団体連絡協議会々長等を歴任。

熱心且つ広範な研究活動の傍ら「水上郷土史研究会」、「丹波自然友の会」等の中高年を主体としたグループの、指導者として後進の育成に努めた。

丹波市水上町と山南町の境付近にあった「丸山二号墳」の調査では、副葬品等から被葬者が女性であり、「播磨国風土記」に記述される「氷上刀売」^{ひかみとめ}であろうと推定したが、神戸新聞論説委員だった古山桂子氏もそれを追認している（『古代播磨の女性たち』上田正昭監修・播磨学研究所編『播磨国風土記』所収）。

また中世後期の水上郡の盟主・赤井氏の出自については、郷土史家の大方が支持した「赤井家系図」、「寛政重修諸家譜」、「氷上郡志」を踏襲する説には、様々な客観的見地から疑問を提起している。

さらに中世後期に美作国英田郡真神村から水上郡に來住したとされる波多野宗高と霧山城（水上町水上・同市辺）についても、その存在に懐疑的な考察を示している。

細見末雄氏は『丹波史を探索』の「あとがき」では次の様に述べている。

ふる里の村誌を書かされるはめになって、思いもそめぬ郷土史に取り組むようになり、かなり多く丹波内の史書や

史料にふれた。(中略) 中には随分観点の相違するものや、明らかに誤とおもわれることもあり、さらには全く落ちこぼれて取り上げられていない史実もあることに気がつくようになった。それでもなるべく確実な資料に基づいて少しでも誤を正したり、疑問点を解明し、さらには書かれてないことも掘り起こして短編を少しずつ書いてきた。(中略)

丹波の歴史はまだまだ解らないことが多く、すべてを解明することは程遠い道である。しかし少しずつでも明らかにして、より正しい丹波の歴史について郷土の人々の関心を深め、さらによりよい丹波史へと発展させていただく踏み台になればと思う。

この本は郷土史研究家・愛好家にとっても、学習の上で欠かせぬ一冊となっている。そのほか植物研究等においても、現在もその成果や事績を偲ぶ声が多く聞かれる。

3 受賞歴

兵庫県半どんの会賞(昭和五〇年)、兵庫県自治賞(昭和五三年)、兵庫県としびの賞(昭和五四年)、神戸史学会賞(昭和六一年、『丹波の莊園』の著述に対し)、勲五等瑞宝章(平成元年)、教育文化賞(平成五年、兵庫県教職員組合より)

4 引用文献

『丹波史を語る』(前記)、『生郷村志』(前記)、『俳句の植物』

(前記) 他

(六) 松井^{まつい}拳堂^{けんどう}

1 著作

『丹波史年表』(丹波史談会、一九三七年。増訂版、「丹波人物誌」「増訂丹波史年表」刊行会、一九六〇年)、『丹波人物誌』(「丹波人物誌」「増訂丹波史年表」刊行会、一九六〇年)、『丹波水上郡志』(丹波史談会、一九二七年)、『柏原町志』(柏原町志編纂委員会、一九五五年)、『兜山余芳』(松井拳名義、私家版、一九二二年、小島省斎伝記) 他

2 略歴・事蹟

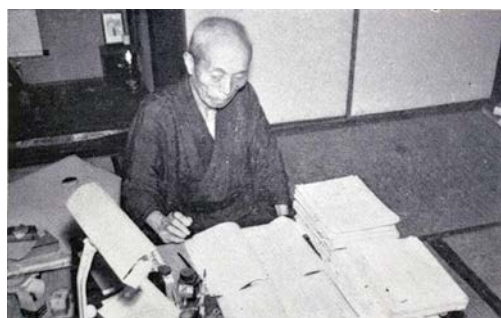


写真6 松井拳堂

明治一〇年(一八七七) 水上郡柏原町(現丹波市柏原町)に生まれる。没年は昭和四五年(一九七〇)。

明治二年(一八八八) 柏原町崇廣高等小学校卒業後、町内の田村竹巖塾で漢字を修める。
明治三〇年(一八九七) 福知山歩兵第二十聯隊に入営、除隊後は日本体育大学の前身である体操学校を卒業。

明治三十六年（一九〇三）静岡中学に教師として赴任するが、日露戦争で満州に出征し殊勲を立て功七級金鵄勲章受勲。

除隊後に陣中での随筆『右剣左筆』を出版する。その後、小田原、大阪、神戸等の中学（旧制）で教鞭をとる。

大正四年（一九一五）「丹波史談会」創設を聞き急ぎ帰郷、『丹波水上郡志』の編纂に従事した。

昭和二年（一九二七）『丹波水上郡志』が完成。傍ら郷里の新聞にも執筆。柏原崇広図書館創建に尽力する。

昭和十二年（一九三七）『丹波史年表』を発刊。

昭和三五年『丹波人物志』を完成する。

少年期に尊敬していた頼山陽⁽¹²⁾とその著作「日本外史」から自らを「山陰外史」と号した。また幕末の柏原藩の儒学者小島省斎の事蹟を『兜山余芳^{かぶとやまよほう}』に、さらに江戸時代の高源寺（丹波市青垣町）を復興した弘厳和尚^{こうげん}の遺墨集を編纂し世間に顕彰した。また水上郡志編纂に関わった後に丹波全郡の郡志に着手の予定であったが断念し、丹波史年表、丹波人物志の編纂に精力を注いだ。

『丹波史年表』は、西暦前六六〇年（神武期）から明治三年（一八六七）の二五〇〇年余に亘る出来事を記載し、さらに『丹波人物志』は兵庫県、京都府の全丹波の約二〇〇〇年にわたる偉人・著名人（原始の伊賀古夜比売から太平洋戦争後に総理を務めた芦田均まで）の五百数十名を時代別に列挙・解説を加え

ている。

『丹波史年表』、『丹波人物志』は現代の丹波（兵庫県・京都府の全丹波地域）において郷土史研究者、愛好者にとつて欠かせぬ参考書となっている。

さて、水上育英会発行の『丹波人物伝』には著名人の関わる三つのエピソードが載せられている。

まず一つは日露戦争従軍中、『右剣左筆』と題した随筆を出版しているが、これを陸軍の乃木大将が愛読し、本の所々に傍線を入れていたという。

二つ目は拳堂翁は達磨の絵を能くし相当な腕前であったが、その絵に当時の首相であった犬養毅（木堂）も賛を寄せたという。三つ目は『丹波史年表』、『丹波人物志』を読んだ一流作家、今東光氏が、「世に郷土史家と称する人はたくさんいますが、これだけの仕事をした人は多く見当たりません。」と感心したという。

『丹波人物伝』には、死の僅か三時間前にしたためたという拳堂翁の遺語が紹介されている。

希望に生き、歓喜に働き、感謝に眠れ

古武士の如く九三才を生き通した翁の最期の言葉と聞けば、

殊更に胸を打つものがある。

3 引用文献

『丹波史年表』（前記）、『丹波人物志』（前記）、『丹波人物伝』（氷上育英会編、丹波新聞社、二〇一四年）他

（七）村上完二

1 著作・著述

『丹波戦国史』（共著、歴史図書社、一九七三年）、『氷上郡の文化財』（氷上郡教育委員会、一九七九年。再刊、一九八九年）、『春日町の文化財』（第1集・第2集、春日町公民館、一九七七年）、『春日町誌』第四卷（共著、春日町役場、一九九五年）、『丹波のむかしばなし』（共著、第1集～第10集、丹波の森協会、一九九八年～二〇一〇年）他

2 経歴・事蹟

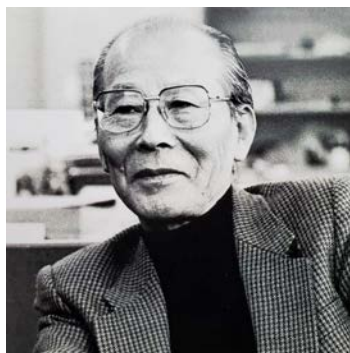


写真7 村上完二

大正一三年（一九二四）氷上郡黒井町（現丹波市春日町）に生まれる。没年は平成二八年（二〇一六）。

昭和二〇年（一九四五）国立兵庫師範学校卒業。陸軍通信学校入学、終戦。

三輪国民学校、生郷中学校、

黒井中学校の教師歴任。

昭和二六年（一九五一）株式会社むらかみ呉服店継承。

昭和二八年（一九五三）結婚。

昭和三二年（一九五七）春日町立黒井小学校校歌を作词。

昭和四八年（一九七三）黒井城跡を調査研究、『丹波戦国史』を共同執筆・出版。

昭和五八年（一九八三）春日町商工会長就任。

昭和五九年（一九八四）春日町文化財審議委員長就任（市制移行後は丹波市文化財保護審議委員会委員長）。

昭和六一年（一九八六）編集委員長として『春日町の文化財』を発行。

昭和六三年（一九八八）丹波の森協会発足、常務理事。

平成元年（一九八九）共同執筆中の『氷上郡の文化財』が完成・発行。

平成四年（一九九二）丹波の森協会とウイーン（オーストリア国首都）一三区との友好親善提携のための仮調印式に、訪問団々長として渡航する。

平成五年（一九九三）黄綬褒章受章。

平成七年（一九九五）編集委員長として『春日町誌』第四巻を発刊。

平成一〇年（一九九八）『丹波のむかしばなし』の編集に従事、第二集から編集副委員長、平成二二年（二〇一〇）に全一〇巻

発行。

村上完二氏には歴史、教育、自然保護等広範にわたる調査研究や地域の指導者としての多方面での活動がある。

地域史についても数々の著述や研究がある中で、特筆すべきは『丹波戦国史』の発刊と地元黒井城の国史跡昇格への情熱と尽力であろう。

『丹波戦国史』刊行のきっかけとなったのは、兵庫県学校厚生会から昭和四七年に出版された『郷土の城ものがたり・丹有編』（丹波・三田地域、兵庫県学校厚生会、一九七二年）の編集委員を委嘱されたことに始まるという。

『丹波戦国史』は芦田確次氏、船越昌氏、青木俊夫氏との共著であるが、芦田氏が「黒井城の沿革」、青木氏が「南北朝期以降の丹波」、船越氏が「戦国動乱期の丹波」、村上氏が「黒井城の遺構」と分担を決めて執筆にかかったとされる。

本誌執筆には十分な資料調査と現地踏査がなされ、地元の郷土史研究家並びに愛好者たちの重要な学習本となっている。中でも、戦国大名となった赤井一族については、「寛政重修諸家譜」、『丹波水上郡志』等を重視した解説・紹介となっている所が特徴である。

『丹波戦国史』のあとがき（共著の四氏連名）には、「本書を世に問おうとした目的は、私たちの郷土に対する単純素朴な郷愁がその動機であった。丹波には戦国時代の名残をとどめる史

跡や、秘蔵されている史料が各所に現存している。そうした文化遺産にまつわる史実については、俗説や伝説のみが語り継がれている感がある。（中略）いわば『丹波戦国史』については、全くベールに覆われたまま放置されていたと言えるのではなからうか。（中略）力の及ぶ限り、その覆われているベールを剥ぎ取り、祖先の足跡を解明したいという思いに駆られた」と記す。本書が執筆者たちの並々ならぬ熱意と使命感によつて綴られたことが理解できる。

3 受賞歴

兵庫県ともしびの賞（平成一四年、地域の文化財保存、同顕彰の功績で）。

4 引用文献

『丹波戦国史』（前記）、『日の当たる道』（村上完二追悼集、村上正樹著、丹波新聞社）他

二 郷土史研究の確かな傍流（地域誌）

旧町村、地区、研究グループ、地区の歴史を大切に思う一区民等による刊行物も市内には多く存在する。

町村誌の場合は、大半が昭和・平成の旧町村合併の際に競つて刊行されている。他のものは、例えば丹波市の誕生後の町づくり計画の策定にともなったもの、一部区民等の村興しに対す



写真8 前山・余田城跡

る熱い志によつてなど随時、随意に発行されてきた。

(一) 旧町村単位のもの

1 『前山村誌』

- ・発行年 昭和六三年（一九八八）一〇月
- ・編集人 前山村誌編集委員会
- ・発行所 前山地区自治振興会
- ・印刷所 (株)丹波新聞社

昭和三〇年（一九五五）三月、竹田村・吉見村・鴨庄村・美和村と前山村が合併して市島町が発足した。旧前山地区は国道

一七五号線が通過し、京都府に隣接する現在の丹波市市島町の北西部にあたる（写真8は地区内に残る余田城址）。

往古は但馬から現在の丹波市青垣町に入り、氷上町の鴨内地区から鴨阪峠を市島町（旧前山村）に越え、同町の旧鴨庄村から現在の京都府福知山市（旧天田郡三和町付近）

を経由して国道九号線沿いに京都に向かう「京都街道」があった。旧前山地区に現在も遺る地名「余田」は、氷上町側にあった「御油新庄」の飛び地となった「御油庄余田」を言い、御油庄と同じ優遇税制を受けたとされる。

さて本誌の特長は、「執筆者の主観を排した上で資料、参考文献を明かにして後々の研究に資すべく正しく表現することに努めた」と「まえがき」にもある通り、「歴史編」には多くの資料を集め、特に中世の記述については当該地区のみならず中央の情勢から丹波全域を俯瞰した時代ごとの解説が研究書の如く語られている。

尚、丹波市山南町の旧久下地区にあった玉巻城の久下氏の一部は、織田軍の丹波攻めで落城後にこの前山地区に隣接した上竹田に移り住むが、久下家に伝わる価値ある古文書が多く保存され、本書にその多くが掲載され解説されているのは大変貴重である。

2 『遠阪校区の「たからもの」読本・遠阪校区史跡調査一覧』

- ・発行年 平成二八年（二〇一六）三月
- ・企画・調査 遠坂村研究会
- ・協賛 遠坂まちづくり委員会

丹波市青垣町の旧遠阪地区は遠阪峠と北近畿豊岡自動車道（隧道）によつて、丹波市から但馬の朝来市山東町に繋がる。織田信長軍の丹波攻めの際は軍將明智光秀を赴援するため、但



写真9 遠阪・萬歳山

馬にあった羽柴秀長が大軍を率い峠を越えて攻め込んで来た。

この本は表紙にもあるように、「遠阪楽校」として地域の二〇〇年先の人づくりを標榜、その活動の一環として発刊されたものである。ふんだんに写真を用い、集落や山麓に眠る史跡や古い遺物の一つ一つを簡潔に紹介していて、発刊意図がよく行き届いた内容になっている。巻末の歴史年表には市内や近隣地区内の太古から現代に至る記事が豊富に列挙されている。

鎌倉幕府の成立後、或は承久の乱後、

関東武士たちが京都方の莊園をあてがわれて丹波にやってくる。その内の武蔵国足立郡から佐治郷に來住したとされる足立遠政が、丹波一円で最も多いとされる足立姓の祖とされ、遠阪校区は令和四年のNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」(遠政の祖父遠元もその一人)にちなみ、「足立さん祭り」を企画し、年間を通じたイベントが展開され盛り上がっている(写真9は足立遠政が來住した山垣地区の萬歳山)。関連史跡として「足立遠政公墓所」、「山垣城跡」などが遺る(何れも青垣町山垣地区)。

3 『山南町久下地区 歴史散歩』



写真10 久下一族供養塔(長慶院)

・発行年 平成二七年
(二〇一五)三月

・発行者 久下自治振興会

観光資源活用委員会

久下地区は丹波市山南町の中心部にあたり、JRの福知山・加古川両線が通り、地域内に谷川・久下村の両駅を有する。

本来の町村誌としては、『久下村誌』が第一部から第三部まで刊行されていて、さらに地域の歴史を知るためにこの『歴史散歩』が出版されたものである。

この本は地域住民へのアンケートをもとに、観光資源の活用のために観光資源活用委員会を組織して各集落ごとに残る夫々の歴史・伝承や祭礼について資料調査、聞き取り調査を行っている。

従ってこの本の作成には多くの住民がかかわっていて、それだけに地区の遺産として、住民の誇りや抛り所として、長く保存され「地域のお宝」が引き継がれて行くのではないかと期待できる。

久下地区は、武蔵国熊谷から鎌倉期に來住した久下氏が、古



写真 11 三方の大カツラ

代からの栗作郷を久下村とし、室町時代の草創期以降、地域挙げて擁護した足利尊氏・義詮親子の信頼を得て一族が隆盛した。そのゆかりの遺跡が地区内各所に残る（写真9は長慶院裏山にある久下一族の合同供養塔）。本誌ではそれらを含め、地域内の細かな紹介が為されている。

（二） 集落誌等

1 『明日につなぐ自遊の郷 三方誌』

・発行年 平成二四年（二〇一二）七月

・編集・発行 三方誌編集委員会

・印刷・製本 株式会社丹波新聞社

三方地区は丹波市氷上町西部の旧葛野村の中でも最も奥まった一帯にあるが、それだけ古里が大事にされてきたのか、中央部には地区内の大きな案内看板もあり、たまたまいの美しい地域である（写真9は丹波市指定天然記念物

三方の大カツラ）。

それぞれが勤労の生活の中で、一地区としてよくぞ本誌を企画し作り上げられたと感服

する内容である。

古跡から、昭和の風景から、地区内の現代のスポットまで、生活する人々の生き生きとした動きが綴られている。

地名の由来については村内の奥・中・下の位置関係から、また三つの谷奥を有することから、さらに宍粟郡三方から来住した三方太夫からと三つの説が述べられている。

歴史について特に項目が設けられているわけではないが、「神社仏閣」の項目等で古い歴史に触れることが出来る。

当地区に多い山口姓の初めとしては、中世末期頃に信州山口村の浪人山口若兵衛が居つき原野を開発したと伝え、近世には大地主で代官役も務めたとする。

赤井家系図にある赤井直之（黒井城主荻野直正の弟）が信州山口村に移り住み、山口を名乗ることとの関連も思われ興味を惹かれる（山口直之父子については、「寛政重修諸家譜」をもとにした池波正太郎著「黒幕」に詳しい）。また住民が山を越えて往来した播州との説話や「鶴の穴」の伝説等も収められている。

2 丹波の森叢書『御油史考』

・発行年 平成一二年（二〇〇〇）二月

・発行人 丹波の森公苑 生活創造活動プランナー養成講座歴史グループ

・印刷製本 永井印刷所



写真11 『御油史考』表紙

御油は丹波市氷上町の北西部にあり、現在の「丹波紅葉三山」の曹洞宗円通寺のある集落である。御油の地名の由来には諸説があるが、うち二説が有力で

ある。

一つは平安前期に皇位継承問題で敗れた源融が失意のうちに滞在した当地「山田村」に、寛平二年（八九〇）、父君の嵯峨天皇と京都上賀茂社の祭神「賀茂別雷命」を合祀し、賀茂大明神を創建したとされ、賀詞「御魂の振油を齋奉る」から命名したと伝わる。

今一つは、それより後に京都法勝寺領であったこの地に、後白河天皇が御燈明料を下賜された事に依るといものである（当時のお灯明は蠟燭ではなく油を用いた）。

さてこの冊子（写真9）は氷上町御油の歴史について纏められてはいるが、地区の住民たちによつて書かれたものではなく、丹波の森公苑（丹波市柏原町柏原・「兵庫県」の広域拠点施設）で集うことになった前記グループの方々一名（一名の地区在住者を含む）によつて作り上げられた価値ある一冊である。

四〇戸に満たない小集落で、地区内に曹洞宗の別格準本山と

された永谷山円通寺という大寺を擁しているものの、地区民さへ見聞したことの無い史実や伝承が細かく紹介されている。巻末の古文書類と共に歴史がよく掘り起こされている。

おわりに

さて、取り留めもなく書き綴らせて頂いたが、とても「丹波市における郷土史研究の潮流」を述べ得たとは思えない。せつかくの諸先生方の研究成果や御功績が十分伝えられず心苦しい限りである。

今回多く学習させて頂いたことの一つに、先生方に共通していることとして、地域史研究家としての卓越した業績や熱意だけではなく、丹波の自然や植生への慈愛、加えて俳諧や詩歌にも深い造詣が有ったことが挙げられる。思うに先生方は生涯を広く深く、全身全霊で以て郷土を愛されていたという風に言えるのではなからうか。

地域誌には、行政の支援を受けたものから一市民の手作りによるものまで、様々なものがある。また活字にはなっているものの、綴じ紐を使った製本のものも有り、おそらくはデータベースとしての保存はなされていないものもあると思われる、後世に残して行く手立てを講じなければならぬものもある。それらも含めて各地域誌は、補訂をしながら是非、後世に残して行つ

て欲しいと念願するものである。

最後にこのような貴重な学習の機会を与えて頂いた神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報『LINK』編集委員会様、またご多用の中、情報・資料・写真等をご提供頂いた皆々様に心からの感謝を申し上げる。

御協力者の皆様

青木 正文様 (市島町)	芦田 典子様 (青垣町)
足立 吉信様 (青垣町)	梅垣 守明様 (柏原町)
奥谷 敏生様 (市島町)	小森 嘉則様 (氷上町)
竹内 吉信様 (氷上町)	永井 郁夫様 (市島町)
村上 正樹様 (春日町)	八木甫瑳子様 (尼崎市)
丹波市立北小学校様 (氷上町)	同西小学校様 (氷上町)

註

- (1) 主に丹波市と丹波篠山市の会員で構成され、定期的に論考集『丹波史』を発行している。
- (2) 丹波市青垣町西芦田にある谷あいの野。桜の名所。「丹波青少年自然の家」がある。
- (3) 本地師はお椀やお盆等の木工品を加工、製造する職人。
- (4) 「山城国風土記」、「釈日本記」、「賀茂縁起」等に記述され、下鴨神社内三井神社に祀られる。氷上町御油の神野神社や市島町梶原の鴨神

社の祭神。

- (5) 丹波市内の高齢者約四〇〇名がそれぞれの趣味の二〇クラスに集う。
- (6) 藤岡謙二郎博士(二九一四～一九八五)は、日本の地理学者。京都大学名誉教授。
- (7) 全四〇巻。南北朝時代の後醍醐天皇の即位から足利尊氏による室町幕府成立、二代將軍足利義詮の死去と細川頼之の管領就任までの約五〇年間を書いた軍記物語。
- (8) ここでは足利尊氏の子、義詮のこと。後に室町幕府二代將軍となる。
- (9) 百観音堂円通庵の良英和尚が、丹波地方の三十六の札所に百観音堂(福知山市三和町畔)を加えて「丹波西国三十七所道中記」として改版したとされる。版木による江戸時代のガイドブック。
- (10) 播磨の三木城落城後、丹波に來住。民を護るため築いたという堤防や経塚が残る。
- (11) 「播磨国風土記」に登場する。讃岐の神・讃岐日子を撃退した丹波の女性リーダー。
- (12) 江戸時代後期の歴史家、思想家、文人。「日本外史」等を著した。
- (13) 第五二代・嵯峨天皇の一三番目(諸説あり)の子。源氏物語の光源氏の実在モデルの一人。